

◆ 今週のコメント

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症(O157 VT1VT2)の報告が2例あります。発生状況は、家族内感染が1例、集団発生が1例となっています。2月の報告数は現在までで6例で、過去5年の2月の報告数(0～1例)と比較して最も多くなっています。本菌は患者や保菌者の便から経口感染し、少数の菌量でも発症するので、今回のように冬期でも報告がみられます。肉等の食品の加熱、食前・排便後の手洗いによる感染予防に加え、二次感染の恐れがある場合は、便で汚染した衣類、寝具、おむつは消毒する等の蔓延防止策の徹底が肝要です。
- ・ 水痘の定点当たり報告数は1.71で、過去5年平均値(1.32)を上回っています。年齢階級別にみると、1歳～5歳で81.4%を占めています。過去の推移をみると今後も報告の多い状態が続く傾向にありますので、動向にご注意ください。
- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は0.83で、第4週以降やや減少しているものの、過去5年平均値(0.65)を上回る値となっています。

◆ 今週のトピックス:<インフルエンザ>

- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は13.53で、増加の程度はやや鈍っているものの、今シーズンで最も多くなっています。詳細はトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

(性、年齢、症状、推定感染地域、推定感染経路の順)

- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症(O157 VT1VT2) 2例

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68、小児科定点41、眼科定点10、基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	13.53	920
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	3.27	134
	② 水痘	1.71	70
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.83	34
	④ 伝染性紅斑	0.34	14
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.27	11
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

病原体情報

検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)
インフルエンザウイルス AH3型(2)	インフルエンザ(第5,6週)	RSウイルス(2)	かぜ症候群 (第4,5週)
ノロウイルスGII(1)	感染性胃腸炎(第5週)	RSウイルス(3)	RSウイルス感染症 (第4,5週)
A群ロタウイルス(2)	感染性胃腸炎(第7週)		

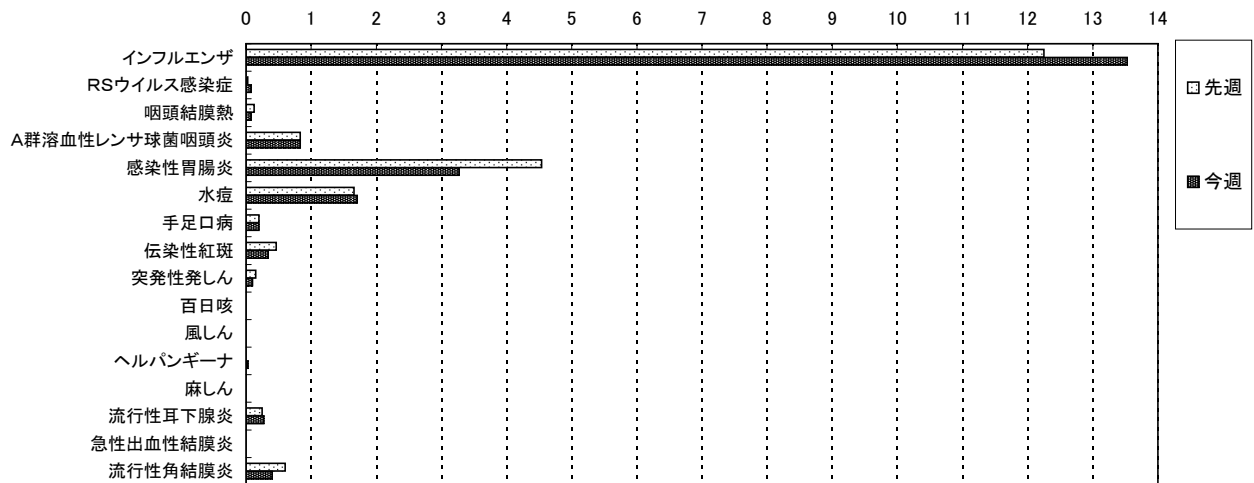
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<インフルエンザ>

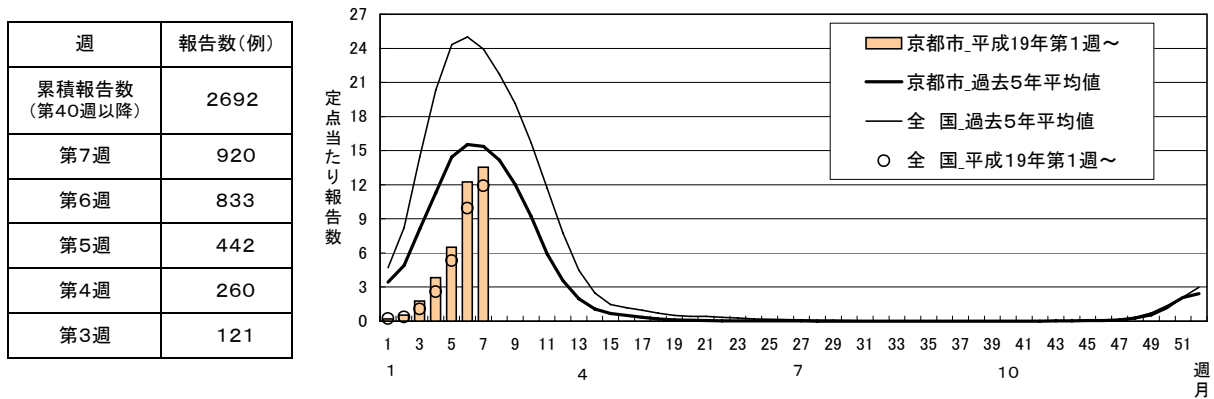
(注)京都市のデータは平成19年2月22日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。
病原体情報は病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第7週)と先週(第6週)の定点当たり報告数の比較

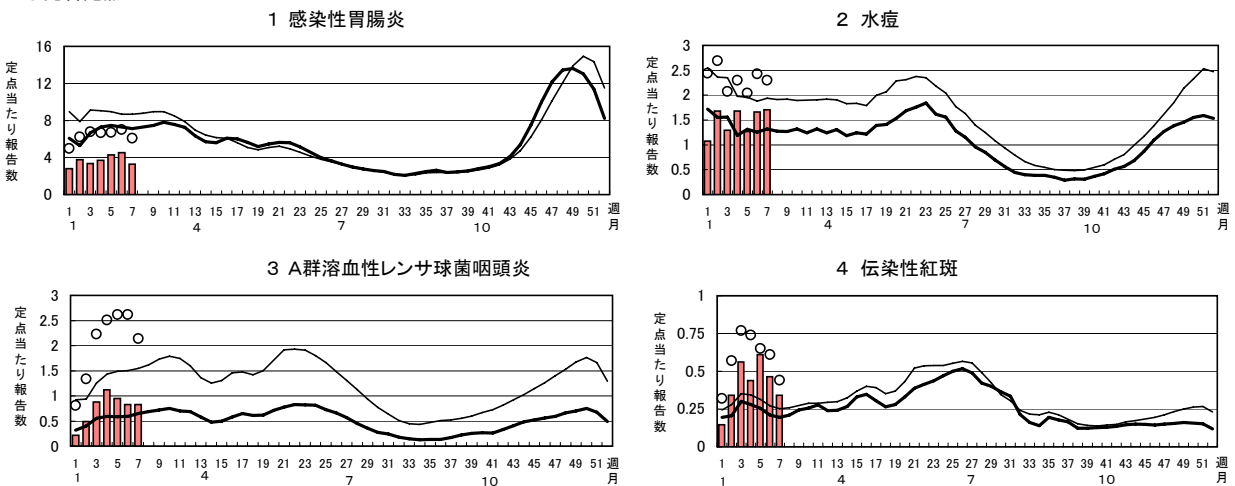


2 インフルエンザの定点当たり報告数の推移

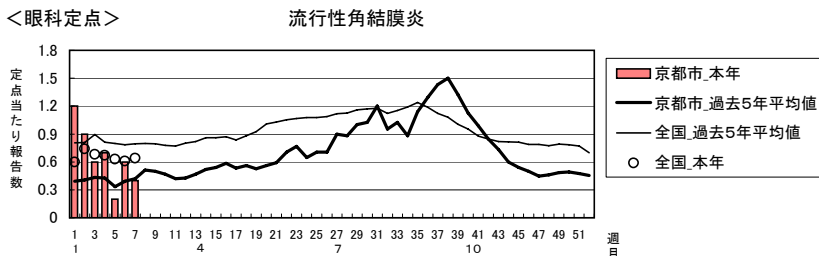


3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



今週(第7週)のトピックス: <インフルエンザ>

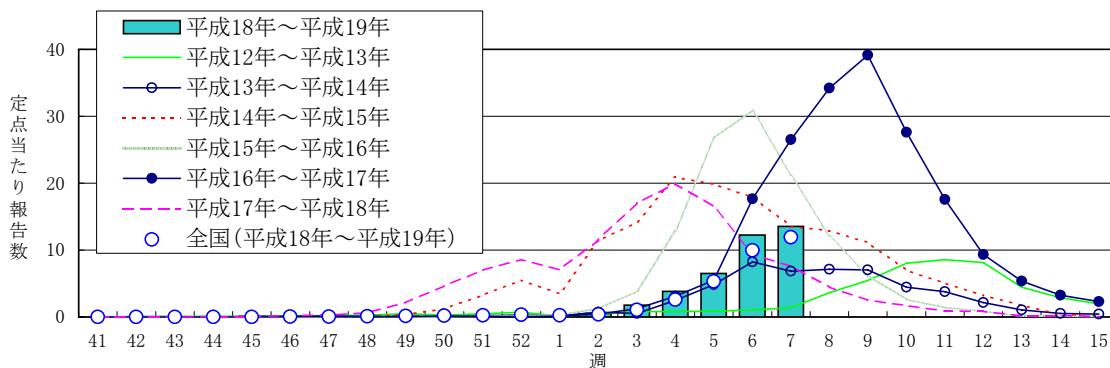
定点当たり報告数は13.53で、増加の程度はやや鈍っているものの、今シーズンで最も多くなっています。全国も同様の傾向です。

行政区別では、第6週に比べて7行政区(上京区、東山区、山科区、下京区、南区、右京区、伏見区)で増加しています。また、全行政区で過去5シーズンの上位10%値を超えています。

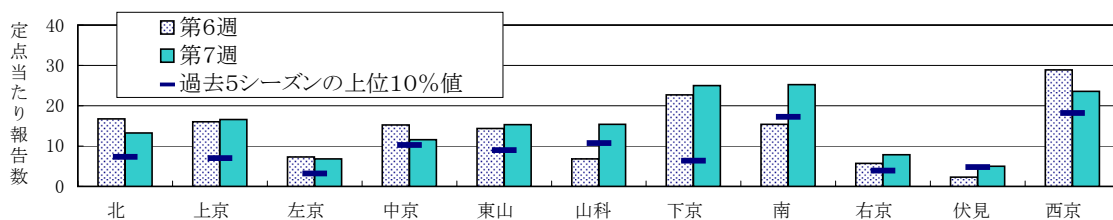
年齢群別割合では、第6週に比べて5~9歳がやや少なくなっていますが、大きな変化はみられません。また、全国(第7週)に比べて20歳以上は多く、15歳未満は少なくなっています。

外出後のうがい及び石鹸による手洗いの励行、睡眠と栄養を十分にとり、体力の保持に努める、気温の変化に注意し、着衣の調整をする、咳エチケットを守る、室内の適度の加湿など、一人ひとりが予防に心がけてください。

定点当たり報告数の推移



行政区別定点当たり報告数



年齢群別定点当たり報告数割合

